

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年3月31日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2012

課題番号：21320058

研究課題名（和文） 他文化＝多文化への眼差し—コウルリッジとロマン主義文学における異文化間交渉の位相

研究課題名（英文） Aspects of Cultural Negotiations in Coleridge and English Romantic Literature

研究代表者

大石和欣（OISHI Kazuyoshi）

東京大学大学院・総合文化研究科・准教授

研究者番号：50348380

研究成果の概要（和文）：

本研究は、ロマン主義詩人・思想家であるサミュエル・テイラー・コウルリッジ（Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834）を中心とする文学テキストにおいて、イギリスが海外覇権を伸長するのにともない複数の「他文化」を内に抱え込みはじめた時代に芽生えた「他文化＝多文化」への眼差しを解きほぐしたものである。宗教、思想・哲学、美学、そして同時代の地政学的な変容といった切り口から複数の研究者が共同で考察することで、これまでのロマン主義批評では見過ごされてきたコウルリッジの思想や作品に包摂された「異文化」を明らかにし、同時にコウルリッジを受容する際の異文化間交渉の過程を分析した。さらには彼の思想や作品の「異文化」における受容の過程を見ることで、異文化間のイデオロギー的な摩擦と融合を含む交渉が明らかにし、文化多元主義を追求する現代において、ロマン主義文学の新しい意義を見出した。国際学会の開催や出版を通して、十分な業績と成果をあげることができた。

研究成果の概要（英文）：

S. T. Coleridge lived in the age when Britain began to expand its maritime hegemony over the world and started to incorporate 'other cultures' and 'others' within its domain. This research primarily aimed to examine how Coleridge's texts as well as other English Romantic texts intertwined within themselves a new view of the British society as increasingly multi-dimensional and multi-cultural. By illuminating the way in which different cultures negotiated with each other and co-existed within literary texts, we hoped to suggest how literature and literary studies can possibly provide a model for the possible ways in which different cultures can coexist interactively through various negotiations in the age of globalisation. As a whole, this research project proved to be intellectually fertile and stimulating, and immensely productive in terms of its outcomes.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	4,400,000	1,320,000	5,720,000
2010年度	3,000,000	900,000	3,900,000
2011年度	4,400,000	1,320,000	5,720,000
2012年度	1,800,000	540,000	2,340,000
年度			
総計	13,600,000	4,080,000	17,680,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学 ・ 英米・英語圏文学

キーワード：コウルリッジ、ロマン主義 異文化間交渉、他文化、多文化主義、帝国主義、受容、オリエンタリズム

1. 研究開始当初の背景

本研究の根底には、研究代表者大石和欣が2001年以降のイラク問題に端を発するイスラムたちに対する西欧諸国の眼差しについての関心や、個人的経験に照らしたイギリスにおける移民問題への関心が根底にある。「他者」としての「他文化」あるいは「異文化」が、多文化主義を掲げるイギリスという国のなかでどのように差異化されつつ包摂されていくのかを個人的な研究領域の中で考察できないか素朴に考えていた。研究アプローチについて具体的な示唆を受けたのは、2002年に京都大学において開催された国際ブレイク学会“Blake in the Orient”での発表および論文集 (Masashi Suzuki and Steve Clark (eds.), *The Reception of Blake in the Orient* (2006)) への寄稿を通してであった。Blakeに内包された多文化的要素にあらためて驚嘆するとともに、それが実はロマン主義文学全体にも当てはまる現象ではないかと気づいたのである。さらに、国際コウルリッジ学会“Coleridge, Romanticism, and the Orient”の開催計画をするにあたり、コウルリッジを中心としたロマン主義文学における「他文化」への眼差しと文化受容・融合のあり方を根底に示えることで、異文化間交渉と多文化共生の位相を考察できるのではないかと思いついた。関連テーマですでに業績のあるコウルリッジ研究者にも研究チームに入ってもらうことで、国際的に価値ある成果を出せる可能性が出てきたため、科学研究費補助金基盤研究 (B) として申請するにいった。

2. 研究の目的

21世紀になって以降、異文化同士の共存の可能性が模索されている。「他者」として立ち現れる「他文化」との接触は、それを見つめ、受けとめる主体との摩擦熱を引き起こすが、それと同時に包摂と共存への可能性も誘発する。それは「異文化理解」という表面的なキャッチフレーズではつかみきれないイデオロギー的複層性とダイナミズムをもったものであろう。その事例としてコウルリッジを軸としたロマン主義時代の文学を考察対象に選ぶことで、現代社会において求められている多文化の交流と共存という大きな課題に対して、意義あるモデルを提示するのがこの研究の主眼であった。

コウルリッジが生きた18世紀後半から19世紀前半にかけては、イギリスが海外覇権を伸長するのにともない複数の「他文化」を内に抱え込みはじめた時代であった。コウルリッジの詩作品や散文、また関連する同時代の文学テクストには、そうした「他文化＝多文化」への眼差しが錯綜し、ときには歪んだ形で内在し、共存している。それらの意味を解きほぐして、歴史的に精査することで、これ

までのロマン主義批評では見過ごされてきたコウルリッジの文化論的な価値が明瞭になると同時に、文化多元主義を追求する現代において、ロマン主義文学の新しい意義が見出そうと試みた。

新歴史主義批評、ついでポスト・コロニアリズム批評などの過去20年間の文芸批評は外在するメタ・テクストによって文学テクストの読み直しを図ってきたが、多文化の交流と共存の可能性を考えるときには、文学テクスト内に内在する「他者」への眼差しがどのようなものであり、それが「自文化」の中にもどのように包摂されていったかその文化的交渉 (cultural negotiations) のプロセスも考究する必要もあるのではなからうか？つまり、「異文化」を取り込むイデオロギー的な摩擦と融合を含む交渉が明瞭になれば、異なる文化の共存の可能性が見えてくるはずである。本研究では、コウルリッジを中心としたロマン主義文学において外在した「他者」がどのように内在した「他文化」、さらには「多文化」として変容し、共存するにいったのかその過程と位相を、宗教、思想・哲学、美学、そして同時代の地政学的な変容といった切り口から複数の研究者が共同で研究することで考察した。「他文化」、さらには「多文化」の確執、交流、そして共存という現代的視点から、ロマン主義文学批評を試みることで、さらに別の新しい意義をもった国際レベルの文学研究成果を提出できるのではないかと考えた。

3. 研究の方法

本研究は、ロマン主義全体を視野に入れつつ多面的かつ多作であるコウルリッジを中心として考察・研究を行うために、9人の研究者集団を組成し、その連携・協力に基づく共同研究として、4年間という期間で国際レベルの研究成果を出すことを目指した。

当初は6人という規模での共同研究を計画していたが、それではコウルリッジの膨大な量の著作や関連資料を渉猟しきれず、また宗教、哲学・思想、地政学や美学など各テーマ中の領域がすべて分析不可能であることが判明した。そのため、やや多い人数とはなるが、すでに関連事項について研究業績をあげている研究者3名を分担者として、さらに2名を研究協力者としてあらたにチームに加わってもらうことで、研究のさらなる効率化と実績向上を目指すべきであると判断した。

研究者の居住地にばらつきがあるために、頻繁に研究会を開催するのが難しかった。年3回の頻度で、東京、名古屋、大阪 (神戸、京都) の3地域でバランスを調整しながら研究会を開催し、そこで各自の担当研究の成果

を公表し、集中的に議論する場を設けて、各自研究を進めていった。また、関連学会で研究メンバーが研究発表する場合には、可能な限りほかのメンバーも出席し、質疑応答に参加したし、論文を活字にした場合には回覧の上、意見交換をメール等でも行い、相互に問題解決を行い、研究を進展させていった。

本研究遂行の過程で、平成 23 年度 7 月に神戸国際会議場において国際学会を開催し、中間発表およびそれまでの共同研究の成果の意義を問うことにした。5 名の講師による基調講演に加え、百名以上にもわたる参加者が国内外から参加し、“Coleridge, Romanticism, and the Orient: Cultural Negotiations” というタイトル・テーマのもとで、斬新な研究発表と白熱した議論を 3 日間にわたり繰り広げた。この国際学会および本共同研究の成果は、各研究者によりこれまで学会発表や学術雑誌論文の形で公表され、一部は平成 23 年 12 月に POETICA, vol.76, Special Issue: “Cross-Cultural Negotiations: Romanticism, Mobility and the Orient” (Felicity James and Kaz Oishi, eds.) に所収され、別の一部は平成 25 年 6 月に刊行される Coleridge, Romanticism and the Orient (David Vallins, Kaz Oishi, and Seamus Perry, eds.) としても公表される。さらに、今後未発表である日本語論文を中心に、出版企画を計画している。

4. 研究成果

平成 21 年度

大石（研究代表者）を中心に、計画に従って、コウルリッジの作品における他文化（＝多文化）的要素を分類した上で、研究グループごとに調査を進めた。全体の研究会は東京において 2 回開催し、それ以外はそれぞれの研究グループで適宜意見交換を行いつつ、シンポジウム 1 回、招聘講演 4 回を開催した。

コウルリッジの初期のユニタリアニズムへの傾倒の中に見られる異質な福音主義的要素、その他文化性＝多文化性について大石、直原、藤井が調査を行い、論文・口頭発表を行った。また、18 世紀末から 19 世紀のイギリスが経験する地政学的変容と他文化の受容とコウルリッジについて、アルヴィおよび大石、勝山が調査を進め、論文として発表した。吉川はコウルリッジやワーズワスの詩作品に使われる庭園のイメージに包摂された他文化性＝多文化性について優れた考察を論文の形で発表した。笹川は 17 世紀からコウルリッジを初めとするロマン主義に流れ込む思想的系譜について論文集を編集し、勝山は植物学との関連を、園田はサウジーとコウルリッジとの対比を論文・学会発表として発表した。

また、シンポジウムを 1 回、公開講演会 3

回を研究会に合わせて開催した。平成 22 年度に繰り越した予算については、直原が大石の代理として学会発表を行うことになった。研究一年目としては極めて高質かつ多くの業績を上げることができたと自負しているが、コウルリッジの思想的ダイナミズムの一部を考察したに留まっており、ドイツ観念論や同時代のアジアへの眼差しとの関連性については、まだ明瞭な考察ができていない。現在の課題として研究を進めている。

平成 22 年度

コウルリッジおよびロマン主義文学における他＝多文化のまなざしについて、大石が統括しながら、哲学領域では笹川と和氣、美学領域では吉川と勝山とヴァリンズが中心となって研究を進めた。また、昨年度から継続して宗教・思想を直原、藤井、和氣、園田が、オリентとの関係をアルヴィが究明した。5 月と 2 月に研究会を開催し、2011 年 7 月に主催予定の国際学会の準備および研究発表について意見交換を行った。

哲学領域においては、ロック、バークリー、デカルト、スピノザ、ライプニッツなどの哲学が、未完に終わった『ロゴソフィア』においてどのような力動哲学として展開されるべきか、カント以後のドイツ観念主義における美の理論の展開に果たしたコウルリッジの役割を明らかにしつつ、空海の芸術論やショーペンハウエルの美の理論との関係性を見出した。また、オリентのイメージが濃厚な詩“Kubla Khan”を軸にして、中国使節団の旅行記や記事との関連性を考察しつつ、コウルリッジ作品における庭のイメージを、文化的・社会的・政治的文脈に照らし合わせて再解釈した。さらに、コウルリッジの“clerisy”論と儒教の思想の類似性、後期の著作 *Aids to Reflection* における神学の特質がアメリカ合衆国に受け入れられていった過程についても考察を進めた。「毒の木」として知られていたジャワ原産のウパスが東洋のイメージとしてロマン主義作品に登場する意味についても明らかにした。いずれのテーマについても学会での研究発表を試みるか、論文として活字化することで、成果発表の形で公表した。

平成 23 年度

7 月 16 日(土)～18 日(月・祝)に神戸で開催したコウルリッジ国際学会“Coleridge, Romanticism, and the Orient: Cultural Negotiations”における研究成果発表の準備および発表が主な共同研究内容であった。平成 21 年から進めてきた研究成果を各共同研究者の担当ごとにとりまとめて、国内外から招聘した講演者や応募発表した研究者とともに発表し、質疑応答を通してその内容と質

を吟味した。その際に国内の関連する共同研究グループと共催することで、より幅広い視野からの検討を行うことが可能になった。ヨーロッパ中心の視点ではなく、アジアからイギリス・ロマン主義の作品・言説を読み直すことで18世紀から19世紀にかけて海外覇権を伸張していたイギリスが抱えた文化的な動揺と多様性が文学テキスト内に埋め込まれていることが明らかになり、とくにコウルリッジの「クブラ・カーン」には異文化の宗教的要素が包摂されているだけでなく、これまでの研究では分からなかった東洋における受容の多様性を含めて文化的なダイナミズムがテキスト内に埋め込まれていることが証明された。

後半は、この国際学会の成果を研究会において検証・再検討すると同時に、いくつかの優れた論文を取りまとめて国際的な学術雑誌を通して公開していく方向で研究を進めた。19世紀初頭における文化的な交渉と人的流動性・移動の問題については *Poetica* の特集号を編集して論文を集めて12月末に公表した。また、次年度に渡ってコウルリッジとオリエントの関係性を哲学的な側面から検証する論文を集めた論文集を編集しつつある。

平成24年度

最終年度は、これまで積み上げた研究成果を検討しながら学会で発表し、論文もしくは研究書として活字化していった。全体としてはコウルリッジの多文化性＝他文化性について多面的に照射することになった。これまでの論文成果に加え、大石（代表者）とヴァリンズ（分担者）は、平成23年度に開催した国際学会で発表された論文のうちコウルリッジとオリエントの関係についての文化交渉にテーマを絞り、論集を編集した（平成25年度6月刊行）。

また大石は日夏耿之介によるコウルリッジ受容について学会発表をし、勝山（分担者）はコウルリッジと当時の植物学の関係、彼と中国式庭園について論文を公表した。和氣（分担者）はコウルリッジと真言密教の思想的相似性を論文にした。アルヴィ（分担者）は、「老水夫行」へと連結する18世紀末の政府主導で行われた調査探検航海やバンクスの博物学ネットワーク、さらに19世紀以前の西洋人の中国旅行記や滞在記と「クブラ・カーン」の関係も考察した。吉川（分担者）は、ヴィクトリア朝中産階級へのコウルリッジ受容の在り方を、旅行文化という切り口から再吟味し、「ワーズワスの」な自然の中の遊歩という「異文化」がコウルリッジの詩学にどう作用したか再吟味した。笹川（分担者）はコウルリッジの剽窃の問題が含む多文化性について論文をまとめ、園田（分担者）は、

コウルリッジのクラリシー（clerisy）論が、エマソンをはじめとする19世紀のアメリカ文学者にどう受容され、独自の学者論の形成に寄与したかについて論考を手掛けた。藤井（分担者）は1799年にロンドンで設立された「宗教冊子協会」の出版物とコウルリッジとの関連性について調査を行なった。直原（協力者）は、コウルリッジの動物観をアリストテレス以来の西洋思想史の中に位置づけつつ、彼の生命論とのつながりを明らかにし、山田（協力者）はコウルリッジの『文学的自叙伝』を翻訳し、多文化性について考察した。

総括

ロマン主義詩人・思想家であるサミュエル・テイラー・コウルリッジ（Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834）が生きたのは、イギリスが海外覇権を伸長するのにもない複数の「他文化」を内に抱え込みはじめた時代である。コウルリッジの詩作品や散文、また関連する同時代の文学テキストには、そうした「他文化＝多文化」への眼差しが錯綜し、ときには歪んだ形で内在し、共存している。それらの意味を解きほぐして、歴史的に精査することで、これまでのロマン主義批評では見過ごされてきたコウルリッジの文化論的な価値が明瞭になると同時に、文化多元主義を追求する現代において、ロマン主義文学の新しい意義を見出そうと試みた。

新歴史主義批評、ついでポスト・コロニアリズム批評などの過去20年間の文芸批評は外在するメタ・テキストによって文学テキストの読み直しを図ってきたが、多文化の交流と共存の可能性を考えるときには、文学テキスト内に内在する「他者」への眼差しがどのようなものであり、それが「自文化」の中どのように包摂されていったかその文化的交渉（cultural negotiations）のプロセスも考究する必要もあろう。本研究では、コウルリッジを中心としたロマン主義文学において外在した「他者」がどのように内在した「他文化」、さらには「多文化」として変容し、共存するにいたったのかその過程と位相を、テキストに主な焦点をあてながら、宗教、思想・哲学、美学、そして同時代の地政学的な変容といった切り口から複数の研究者が共同で考察した。コウルリッジの哲学・思想における異文化間交渉の過程、彼の詩作品や言説におけるその表象やテキスト上の問題、さらには彼の思想や作品の「異文化」における受容の過程を見ることで、コウルリッジの思想や作品に包摂された「異文化」を明らかにし、同時にコウルリッジを受容する際の異文化間交渉の過程を分析した。異文化間のイデオロギー的な摩擦と融合を含む交渉が明らかになることで、異なる文化の共存の可能性

をさぐる試みである。

本研究遂行の過程で、平成 23 年度 7 月に神戸国際会議場において国際学会を開催し、中間発表およびそれまでの共同研究の成果の意義を問うことにした。5 名の講師による基調講演に加え、百名以上にもわたる参加者が国内外から参加し、“Coleridge, Romanticism, and the Orient: Cultural Negotiations”というタイトル・テーマのもとで、斬新な研究発表と白熱した議論を 3 日間にわたり繰り広げた。この国際学会および本共同研究の成果は、各研究者によりこれまで学会発表や学術雑誌論文の形で公表され、一部は平成 23 年 12 月に *POETICA*, vol.76, Special Issue: “Cross-Cultural Negotiations: Romanticism, Mobility and the Orient” (Felicity James and Kaz Oishi, eds.) に所収され、別の一部は平成 25 年 6 月に刊行される *Coleridge, Romanticism and the Orient* (David Vallins, Kaz Oishi, and Seamus Perry, eds.) としても公表された。未発表である日本語論文を中心に、今論文集を計画している。ポスト・コロニアリズム批評はもちろん、エコロジー批評によっても社会的にも価値ある文学研究のあり方が示されてきたが、「他文化」、さらには「多文化」の確執、交流、そして共存という現代的視点から、ロマン主義文学批評を試みたことで、新しい意義をもった文学研究成果をあげることができたのではないかと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 26 件)

- (1) 大石和欣 “An Unaccountable Diagonal: Coleridge as a Faltering Unitarian Philanthropist.” *IVY* 42 (2010): 23-41
- (2) 吉川朗子 “An 1850 ‘Wordsworth’ Album and the Poet’s Nineteenth-Century Reputation” *Romanticism* 15 (2000): 156-180
- (3) 吉川朗子 “The Abounding Honeysuckle: Edward Thomas, S.T. Coleridge, and the Quantock Hills.” *Edward Thomas Fellowship Newsletter* 62 (2009): 23-31
- (4) 吉川朗子 “Sarah Hutchinson’s Viewpoints: Her Journals in the Lake District: March to August 1850.” *Grasmere 2009* (2009): 132-45
- (5) 直原典子 “Coleridge’s Trichotomous Theology,” *The Coleridge Bulletin: The Journal of the Friends of Coleridge*, ns 36 (2010) 41-48.
- (6) 勝山久里 「イギリス・ロマン主義と生命科学—コールリッジの『生命論』と『文学評伝』『京都造形芸術大学紀要 (GENESIS)』14 号 (2010 年) : 244-51
- (7) 吉川朗子 「コールリッジと文学観光—サ

マセットの二つのコテージ』『神戸外大論叢』63 (2013) : 61-78

〔学会発表〕(計 27 件)

- (1) 園田暁子 「サウジの Sir Thomas More とコールリッジの On the Constitution of the Church and State に見る変革の時代の知識人」日本英文学会第 81 回大会 (於東京大学駒場キャンパス) 2009 年 5 月 31 日
- (2) Alvey 宮本なほ子 「二人のシェリーと旅行/記」第 18 回シェリー・シンポジウム (於東京大学山上会館) 2009 年 12 月 5 日
和氣節子 “Coleridge and Kant’s Explanation of Willkur/Wille Relation,” Coleridge Conference (Bridgwater College) 2010 年 7 月 22 日
- (3) 直原典子 “Coleridge’s Trichotomous Theology as a Trial of Unifying the Church,” Coleridge Conference (Bridgwater College) 2010 年 7 月 24 日
- (4) Nahoko Alvey “Transfer and Transformation of Information: The Poison Tree as Cultural Document,” Digital Romanticisms (於東京大学本郷キャンパス) 2010 年 5 月 24 日
- (5) 園田暁子 “What would the Romantic poets say about today’s digitalization and copyright questions?” Digital Romanticisms (於東京大学本郷キャンパス) 2010 年 5 月 22 日
- (6) 藤井佳子 「F.D. モーリスのコールリッジ受容—キリスト教社会主義運動と Muscular Christianity を視野にいれて—」イギリス・ロマン派学会全国大会 (於大阪大学) 2010 年 10 月 10 日
- (7) David Vallins, “Radicalism and Idealism in Yeats and Coleridge” Coleridge Conference (Bridgwater College) 2010 年 7 月 27 日
- (8) 吉川朗子 「コールリッジと文学観光—Clevedon の Myrtle Cottage」イギリス・ロマン派学会第 37 回全国大会 (於山梨大学) 2011 年 10 月 23 日
- (9) 和氣節子 “On Artistic Disinterestedness: Coleridge, Kant, and Schopenhauer Compared,” “Coleridge, Romanticism, and the Orient: Cultural Negotiations” (神戸国際会議場) 2012 年 7 月 17 日
- (10) 直原典子 “Coleridge’s Transatlantic Influence: Various Interpretations of Reason,” “Coleridge, Romanticism, and the Orient: Cultural Negotiations” (神戸国際会議場) 2012 年 7 月 17 日
- (11) 園田暁子 “Coleridge’s ‘Clerisy’ and Confucianism in ‘The American Scholar’: How They Inspired Ralph Waldo Emerson,” “Coleridge, Romanticism, and the Orient: Cultural Negotiations” (神戸国際会議場) 2012 年 7 月 17 日
- (12) 藤井佳子 “The Reception of Muscular Christianity in Japan: from Coleridge to Inazo

Nitobe," "Coleridge, Romanticism, and the Orient: Cultural Negotiations" (神戸国際会議場)2012年7月16日

(13) 勝山久里 "Kubla Khan and British Chinoiserie: the Geopolitics of the Chinese Garden," "Coleridge, Romanticism, and the Orient: Cultural Negotiations" (神戸国際会議場)2012年7月17日

(14) David Vallins, "Immanence and Transcendence in Coleridge's Orient," "Coleridge, Romanticism, and the Orient: Cultural Negotiations" (神戸国際会議場)2012年7月17日

(15) 大石和欣「日夏耿之介と浪漫主義」第38回イギリス・ロマン派学会全国大会(於熊本大学)2012年10月21日

(16) 和氣節子「コールリッジと曼荼羅」第9回イギリス理想主義学会 総会・研究大会(於帝京短期大学)2012年8月26日

(17) 吉川朗子「Consolation of Walking—コールリッジ、山歩き、想像力」日本英文学会関西支部大会(於京都大会)2012年12月22日

〔図書〕(計15件)

(1) 笹川浩他(編著)『伝統と変革—十七世紀英国の詩泉をさぐる』中央大学出版部、2010年、639頁。

(2) Kaz Oishi and Yukiko Dejima (eds.), *Foundations of the National Trust: Lives and Works of Octavia Hill, Robert Hunter and H. D. Rawnsley*, 5 vols. (Kyoto: Eureka Press, 2011)

(3) 大石和欣・出島有紀子、『ナショナル・トラスト創設関連文献復刻集成—オクタヴィア・ヒル、ロバート・ハンター、ハードウィック・ローンズリー 別冊日本語解説』

(4) (共著)大石和欣『近代イギリスを読む—文学の語りと歴史の語り』見市雅俊編(法政大学出版局、2011年)288頁。

(5) (共著) Saeko Yoshikawa, *English Romantic Writers and the West Country: Essays in Memory of Jonathan Wordsworth*, Ed. Nicholas Roe (London: Palgrave, 2010) 323pp.

(6) (共著) David Vallins, *The Emergence of Mind: Representations of Consciousness in Narrative Discourse in English*, Ed. David Herman (University of Nebraska Press, 2011) 328pp.

(7) Kaz Oishi and Felicity James (eds.), POETICA, vol.76, Special Issue: "Cross-Cultural Negotiations: Romanticism, Mobility and the Orient." (2011) 96pp.

(8) (共著) 大石和欣『テキストの解釈学』松澤和宏編(水声社、2012年)444頁。

(9) (共著) 大石和欣『ヨーロッパ文化の光と陰』小田原瑤子編(勁草書房、2012年)296頁。

(10) David Vallins, Kaz Oishi, Seamus Perry

(eds.), *Coleridge, Romanticism, and the Orient* (London: Bloomsbury, 2013) 227pp.

(11) (共訳) 笹川浩・山田崇人・S. T. コールリッジ『文学的自叙伝—文学者としての我が人生と意見の伝記的素描』(法政大学出版局、2013年)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

大石和欣 (OISHI Kazuyoshi)

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号: 50348380

(2)研究分担者

和氣直子 (WAKE Naoko)

神戸女学院大学・文学部・教授

研究者番号: 00248113

勝山久里 (KATSUYAMA Kuri)

京都造形芸術大学・芸術学部・教授

研究者番号: 00351362

園田暁子 (SONODA Akiko)

中京大学・国際教養学部・准教授

研究者番号: 00434564

アルヴィ宮本なほ子 (ALVEY-MIYAMOTO Nahoko)

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号: 20313174

笹川浩 (SASAGAWA Hiroshi)

中央大学・商学部・教授

研究者番号: 30325288

吉川朗子 (YOSHIKAWA Saeko)

神戸市外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号: 60316031

藤井佳子 (FUJII Yoshiko)

奈良女子大学・文学部・非常勤講師

研究者番号: 70379527

デイヴィッド・ヴァリンズ (David Vallins)

広島大学・文学研究科・教授

研究者番号: 70403623